

# 商売繁盛の聖地へ

～2026年、北海道の未来を支える企業としてさらなる飛躍を誓う旅～

道央支店 飼料課 課長 畠山知齊

2026年2月、私たちは岐阜県の千代保稲荷神社(おちよぼさん)と京都府の藤森神社を参拝しました。この旅は、単なる社内行事ではありません。「北海道の農業と建材産業を支える企業として、これからどう成長していくのか」その原点を見つめ直す、大切な節目となりました。

私たちの仕事は、地域の産業を支える“縁の下の力持ち”です。だからこそ、歴史ある神社で商売の原点に触れ、「人に寄り添う商いとは何か」「地域に貢献する企業とは何か」を社員一人ひとりが改めて考える機会となりました。

## 【商売繁盛の聖地・千代保稲荷神社】

### 地域に根ざした商いの文化から、企業としての姿勢を学ぶ

岐阜県海津市にある千代保稲荷神社は、年間200万人以上が訪れる商売繁盛の名所。“おちよぼさん”の愛称で親しまれ、地元の人々の生活に深く根付いています。

#### ■油揚げをお供えする独特の文化

参拝者はお賽銭の代わりに油揚げを供え、稲荷神の使いである狐に願いを届けます。境内には“おさがりの油揚げ”が段ボールいっぱい並び、地域の人々が自由に持ち帰ることができるという、温かい文化も残っています。

こうした風習からは、「商売は地域の人々とのつながりで成り立つ」という昔ながらの価値観が伝わってきます。

#### ■名刺を納めるユニークな風習

千代保稲荷神社には、参拝者が名刺を納めて祈願する習慣があります。「神様に名前を覚えてもらう」という、商売人らしい願いが込められた風習です。

私たちも名刺を納めながら、“お客様に覚えていただける存在でありたい”という想いを新たにしました。

北海道の農業・建材を支える企業として、お客様一人ひとりに寄り添い、信頼される存在であり続けたい。その決意を胸に刻む時間となりました。



油揚げのお供え



↑ 名刺を納める箱

↑ 名刺を納める箱拡大写真

## 【藤森神社で誓う 2026 年の飛躍】

歴史と「勝運」の力に触れ、挑戦する心を磨く

京都府伏見にある藤森神社は、1200 年以上の歴史を持つ古社。菖蒲(しょうぶ)＝勝負に通じることから、勝運の神として信仰され、競馬関係者からも厚い支持を集めています。

■2026 年は 60 年に一度の「丙午(ひのえうま)」

火のエネルギーを持つ「丙」と、躍動を象徴する「午」が重なる年。まさに**挑戦と飛躍の象徴**ともいえる一年です。

境内には馬にまつわる絵馬や御朱印が並び、「挑戦する者を後押しする力」が満ちていました。

特に印象的だったのは、“馬九いく(うまくいく)”と願いが込められた大きな絵馬。「努力を続ければ、必ず道は開ける」というメッセージを感じました。

私たちもこの勝運を北海道に持ち帰り、お客様の成功を支えるパートナーとして、2026 年を“飛躍の年”にしていきます。





馬九(頭)いく



九つの幸せの説明



←左馬の御朱印(右のページ)

## 【丹波篠山の名店「奥栄」で味わう、伝統のぼたん鍋】

参拝の合間には、丹波篠山の老舗「奥栄」で名物ぼたん鍋をいただきました。囲炉裏風の座敷が広がる店内は、どこか懐かしく、心が落ち着く空間です。

### ■伝統が息づく味

大輪の牡丹の花のように盛り付けられた猪肉は、噛むほどに旨味が広がり、特製味噌との相性も抜群。「どれだけ煮詰めても塩辛くならない」という秘伝の味噌は、長年の経験とこだわりが詰まった逸品でした。

歴史ある料理を味わいながら、“伝統を守りながら新しい価値を生む”という企業としての姿勢を重ね合わせる時間となりました。



## 【最後に—農業と商売の原点に立ち返って】

「稻荷」の語源は“稻生り”。五穀豊穡と商売繁盛は、古くから深く結びついています。

今回の参拝を通じて、私たちは企業としての使命を改めて確認しました。

- 千代保稻荷神社で授かった五穀豊穡のご加護を胸に、北海道の農業を支える資材・情報をより良い形で届けること。
- 藤森神社で得た勝運を力に、お取引先様の成功と笑顔を生み出すこと。

2026年度も、社員一人ひとりが挑戦し、成長し、北海道の未来を支える企業として歩み続けます。